

シギ・チドリ類調査 ニュースレター



モニタリングサイト1000

環境省自然環境局生物多様性センター / NPO法人バードリサーチ

2021年度春期概要

2021年度春期結果の概要

モニタリングサイト1000シギ・チドリ類調査の2021年度春期の概要をお知らせします。



前年度に続き個体数はやや増加

2021年度春期調査は、2021年4月1日から2021年5月31日までの期間実施されました。新型コロナウイルス感染症の影響で活動が制限される中、116ヶ所の調査サイトで調査が実施され、このうち一斉調査（2021年4月25日を基準日とした前後1週間の調査）への参加は104ヶ所でした。一斉調査期間では、シギ・チドリ類43種33,322羽のほか、ツクシガモ502羽、ヘラサギ31羽、クロツラヘラサギ177羽、ズグロカモメ25羽が記録され、春期の全サイトの最大個体数（調査期間内に記録された各種個体数の最大値）の合計では、シギ・チドリ類51種73,007羽のほか、ツクシガモ1,066羽、ヘラサギ54羽、クロツラヘラサギ339羽、ズグロカモメ301羽が記録されました。



Fig1. 春期調査における全サイトと継続調査しているサイトの最大個体数合計の推移（2000年度から2022年度の継続サイトN=40）年次変動の大きいヒレアシギ類は除外

2000年度春期以降の「全サイト」と「調査が継続されているサイトのみ」の最大個体数の合計を、ヒレアシギ類を除いてグラフに示しました（Fig1）。全サイトの最大個体数の合計は、前年度春期と比べ3,568羽増加し72,674羽、継続サイトでは前年度春期と比べ1,272羽増加して44,938羽となりました。全サイト、継続サイトともに、前年度に比べ約3~5%増加し、2年連続で増加傾向が見られました。

100羽以上観察された調査サイトのうち前年度比で増加数が大きかったサイトは、大授搦（佐賀県）、大野島（福岡県）、氷川（熊本県）、白川河口（熊本県）、藤前干潟（愛知県）であり、九州の調査サイトが上位に位置していました（Table 1）。一方、減少数が大きかったサイトは、曾根干潟（福岡県）、コムケ湖（北海道）、高松～河北海岸（石川県）、濤沸湖（北海道）、谷津干潟（千葉県）であり、地域は様々ですが、北海道のサイトが2サイト含まれていました（Table 2）。春期における北海道の調査サイトでは、トウネンが個体数の半数を占める傾向がありますが、そのトウネンの個体数が減少している影響が大きいのではないかと考えられます。

Table 1. 春期調査における増加数上位5サイトと増加率

	2020年	2021年	増加数	増加率
大授搦	14,763	18,368	3,605	24%
大野島	41	2,064	2,023	4934%
氷川	1,017	1,995	978	96%
白川河口	1,418	2,347	929	66%
藤前干潟	1,871	2,558	687	37%

Table 2. 春期調査における減少数上位5サイトと減少率

	2020年	2021年	減少数	減少率
曾根干潟	1,850	816	-1,034	-56%
コムケ湖	1,206	555	-651	-54%
高松～河北海岸	1,707	1,194	-513	-30%
濤沸湖	1,229	731	-498	-41%
谷津干潟	1,204	743	-461	-38%



ハマシギの個体数が増加傾向

観察された最大個体数を上位から並べたところ (Fig2)、ハマシギ、チュウシャクシギ、トウネンが優占していました。前年度順位からは、チュウシャクシギとトウネンが入り替わりました。ハマシギは2013年度頃から最大個体数に対する優占率が上昇傾向にあり、全体の約半数の個体数を占めるに至りました。チュウシャクシギも2012年度春期以降は減少傾向にありましたが、

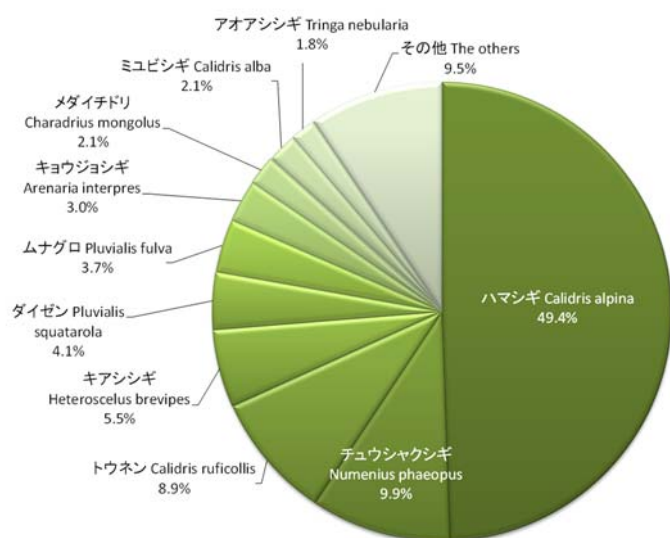


Fig2. 2021年度春期調査におけるシギ・チドリ類の種構成

Table3. 春期調査における最大個体数の増加数・減少数の上位5種

	2020年	2021年	増加数	増加率
ハマシギ	32,102	36,100	3,998	12.5%
キアシシギ	3,601	4,010	409	11.4%
アオアシシギ	1,079	1,331	252	23.4%
ソリハシシギ	911	1,143	232	25.5%
キョウジョシギ	1,981	2,194	213	10.8%
	2020年	2021年	減少数	減少率
トウネン	8,057	6,504	-1,553	-19.3%
メダイチドリ	2,060	1,536	-524	-25.4%
ミュビシギ	2,004	1,531	-473	-23.6%
セイタカシギ	357	161	-196	-54.9%
シロチドリ	575	393	-182	-31.7%

前年度から増加していました。

種別の個体数の増減では、前年度春期は43%の増加だったトウネンが、最も減少 (-1,553羽) していました (Table3)。もともと年度による変動が大きい傾向があります。またメダイチドリも同様に前年度とは逆に減少傾向 (-524羽) でした。シロチドリは前年度に続いて減少傾向 (-182羽) です。前述したハマシギは前年度に続いて増加傾向 (+3,998羽) で約10%ずつ伸びています。渡来数が増加したか、もしくは越冬個体が繁殖地に戻る時期が遅くなっているのかもしれない。西日本に多いソリハシシギも前年度に続き増加傾向 (+232羽) を示していました。



アカエリヒレアシシギはどこへ

アカエリヒレアシシギは、主に海洋で生活し、海上が荒れた時に沿岸の湿地で記録されることがあります。数万羽記録されることも



Photo1. アカエリヒレアシシギ

Photo by Toshifumi Miki

あれば、ほぼ観察されない年もあり、必ずしも湿地の状況を反映していないので、全体の個体数からは除いて図などを示すことがあります (Fig 1)。2014年以降は観察数が1万羽を越える年がなく (Fig 3)、日本近海に大きな群れがない、もしくは荒天に遭うことが少なくなっているのかもしれない。

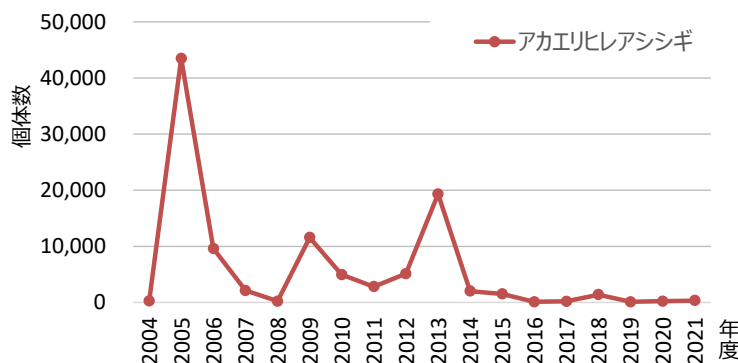


Fig3. 春期のアカエリヒレアシシギ最大個体数の推移 (2004-2021年度)

モニタリングサイト1000 シギ・チドリ類調査 ニュースレター タイトル写真:ミュビシギ(守屋年史) 2021年度 春期概要

発行元: 環境省自然環境局生物多様性センター

<http://www.biodic.go.jp/moni1000/>

編集: 特定非営利活動法人 バードリサーチ

<http://www.bird-research.jp/>

編集者 守屋年史

電話/Fax: 042-401-8661

メール: shigichi@bird-research.jp